

アイヌ民族と2人の英国人(3)

小 柳 伸 顕

5 アイヌ民族へのアプローチ

J・バチラー(1854～1944)とN・Gマンロー(1863～1942)の2人の英国人がどのような動機や意図でアイヌ民族について関心を持ったかは、2人のアイヌ理解と不可分です。2人のアイヌ民族の文化・宗教理解の手がかりとして、前回(5.1.1～6)は₁、バチラーでした。今回はマンロー(5.2.1～8)に目を向けてみます。

5.2 マンロー₂

5.2.1

マンローは、英国エディンバラ大学で医学を修め、船医となり海外に出たのは1888年、マンロー25歳のときです。

船医志望には理由がありました。少年時代から考古学(旧石器)に関心があり、船医になれば海外で発掘調査が可能と考えたからです。その夢は、インド各地での発掘調査で実現しますが、病気治療で来た横浜で医師として働くことになります(1891年)。1905年には日本に帰化しますが、帰化後も医師であり、また考古学研究者としての道を続けます。考古学研究の延長線上に北海道旅行がありました(1898年)。案内役は、J・バチラーです。平取町二風谷や白老村にアイヌ民族を訪ねています。これが、アイヌ民族とマン

キーワード：マンロー、アイヌ、アルコール問題、結核、調査と答申

ローの最初の出会いです。函館の路上で差別されているアイヌと出会ったバチラーと違いコタンで生活するアイヌとの出会いが、マンローの最初の経験でした。

5. 2. 2

マンローは、生前2度の火災（1923年関東大震災 横浜、1932年北海道二風谷）にあい、考古学、人類学、アイヌ民族関係資料を多数焼失しています。そのためか生前発表された論文は、決して多くありません。

マンローの論文集Ainu Creed and Cultにしても出版されたのは、1962年で、B. Z. Selingman編集のものです。死後20年、ロンドンでの出版です。

アイヌに関する最初期（現存）の論文は、英文「アイヌの熊祭」1916年4月です。The Ainu Bear Festivalと題して英字新聞The Japan Advertiserに掲載されたものです。日本語に訳されたものとなるともっと限られています。Ainu Creed and Cultが、日本で翻訳出版されたのは2002年です。

その意味で1918年「北海道報」に発表された「アイヌ観」は、マンローのアイヌ理解を知るうえで重要な手掛りです。

「アイヌ観」は、1918年2月24日から同年3月7日までの11回にわたり「北海道報」に連載され、その後雑誌「北海之教育」第302号（1918年3月）、第303号（1918年4月）に再録されています。

『ニール・ゴードン・マンロー博士書誌』を編集・出版した出村文理³は、残念なことに「アイヌ観」の英文原稿とその翻訳原稿の所在は不明と記しています。従って初期のマンローのアイヌ理解は、さきにあげた二つの文章に基く以外知ることができません。しかし、この「アイヌ観」にも限界があります。それは「アイヌ観」が、所謂論文でないからです。北海道庁からのアイヌに関する諮問に対するマンローの答申が「アイヌ観」です。

「諮問」に対する「答申」であることは、残された資料から証明できますが、なぜ北海道庁がマンローへ「諮問」したかは不明です。バチラーを介しての依頼とも想像できますが、「自叙伝」を残していないマンローの場合、裏付

ができません。

5.2.3

「アイヌ観」は、前述のように「北海道報」に公表され、同時期に「旧土人に関する調査」と題名が変更され「北海之教育」に再録されます。それから56年後の1974年、出村文理の尽力で北海道史の研究資料「北海道史研究」第3号(1974年8月)、第4号(1974年12月)にその解題とともに紹介されます。

「北海道報」や「北海之教育」への公表がなければ、英文原稿や翻訳原稿が所在不明の現在、マンローへの北海道庁からの「諮問」と「答申」があったことは知り得てもその「答申」内容は、それこそ永遠の謎と言えましょう。

北海道庁からのマンローへの「諮問」は、谷万吉の手で保存されていた資料から知ることができますし、「アイヌ観」がそれへの「答申」だったことが証明されます⁴。

マンローは、「答申」を北海道庁に1917年12月12日付けで提出しています。宛先は、北海道庁御中で、差出人は、白老にて・ドクトル・マンローです。

拝啓貴庁より御下問に係る左記事項に対し答申上候

- 一 アイヌの人口増加に対する障害及其増加を助くる条件
- 二 和人とアイヌとの接触はアイヌを向上せしむるや否や
- 三 家庭及社会の感化がアイヌ族に及ぼす影響
- 四 アイヌは高等なる宗教を理解し又は専念し得べきか
- 五 アイヌを救済し且つ進歩せしむる有効なる方法

そして「小生の答申は……」と続きます。

マンローはこの答申が少々長くなったこと、しかし腹藏のない意見であること、またタイプライターが故障していたこと(あるいは手書き原稿なのか)など諸事情を述べ次のように結んでいます。

「小生は横浜に帰り可申しへども若し意見を呈せられ候に於ては独りアイヌに限らず世界の他地方に於ける文化低き種族に関しても能ふ限りは喜で答可致候 敬具」

この「答申」が白老から発信されたのには理由があります。マンローは、調査研究の対象を日本の考古学からアイヌ研究に移し、長期滞在型のアイヌ研究をはじめています。1915年には、釧路のアイヌコタンに足を運び、1916年には5月～6月にかけて白老で研究調査をしています。1917年も時期は特定できませんが、12月まで白老で研究を続けており、そこへ北海道庁から「諮問」の依頼があり、それに答えて横浜へ帰っていったのです。

北海道庁がマンローにさきにあげた五項目について「諮問」したのは理由がありました。北海道庁は、1918年『旧土人に関する調査』を刊行します。そのためマンローに意見を求めたことは明らかです。マンローの「答申」が、「旧土人に関する調査」にどのくらい生かされているかは、後述することにして、マンローが長期滞在し研究を続けた白老の当時の状況について注目してみます。

5. 2. 4

白老についての資料があります。「旧土人に関する調査」でも活用されているものです。1913年（大正2）7月10日刊の報告書「北海道庁警察部 白老村・敷生村・元室蘭村 旧土人結核・トラホーム調査復命書₅」（以下『調査復命書』と略）です。

この種の報告書は白老村に限らず、旭川、日高、余市などがあります₆。報告書は『旧土人衛生状態調査』と白老とは名称は違いますが、調査担当者は警察医で報告の相手は北海道警察部です。これらは、いずれもアイヌコタンの衛生状態が調査対象ですが、アイヌコタンの生活全般にも言及しています。

さてマンローが調査研究した白老村の状況はさきの『調査復命書』から知

ることができます。この調査は「白老村戸長役場」が対象ですが、そこには白老村、敷生村、社台村の3村があり、それぞれにアイヌコタンと呼ばれる集落があることが明記されています。

マンローが滞在、研究を続けたのは、三村の3コタンなのか白老村のコタンだけなのかは不明です。3村の人口状態は次の通りです。しかし、ここで紹介する統計には、次のような註記が付されています（この統計表は、『調査復命書』の統計を筆者の手で再編集したものです₇）。

統計上のアイヌ人口について

同役場管内ニ於テハ○五人ノ土人ヲ保容スルナルモ實際ニ於テハ他村ニ出稼シ全戸ヲ拳ゲテ遠行シ居ル者多キヲ以テ現在人員甚タ少ク、当時約半分以上ヲ止ムルニ過キルト云フ

と記しています。つまり、コタンでは貧しくて生活できないので、あるアイヌは一家をあげて出稼ぎに行っているところもあり、実際は半数ぐらいの人数しか生活していないと指摘しています。「北海道旧土人保護法」（1899）が成立施行され、僅か20年たらずのうちにコタンが崩壊しつつあることが読みとれます。

村名	全戸数	全人口	内アイヌ戸数	内アイヌ人口	村でアイヌ人口が占める割合
白老村	225	1,525	77	324	21.2%
敷生村	253	1,584	74	352	22.2%
社台村	48	323	25	129	39.9%
計	526	3,432	132	805	23.5%

註 『調査復命書』の統計では「土人」と記されているものを筆者は「アイヌ」とした。以下同じ。

次に人口増加と深く関係する出生と死亡について「復命書」に注目してみ

ます。ここでは、3村ではなく白老村コタンについて整理してみます。統計は⁸、過去3年（1910年〈明治43〉、1911年〈明治44〉1912年〈大正元〉）の平均値です。

白老村過去3年平均の出生と死亡と増加率

	人口	出生(人)	人口比(%)	死亡(人)	人口比(%)	増加率(%)
アイヌ	324	13.3	4.1	8.3	2.56	1.54
和人	1,201	48.6	4.04	26	2.16	1.98

この統計から言えることは、アイヌの出生率は、和人より高いが、死亡率は、和人が少なく、結果として和人の人口は増加する傾向にあることです。

この死亡率は、3ヶ年の結核検診で発見された結核患者と無関係ではありません。『調査復命書』は次のように白老村のアイヌについて述べています。男65人、女90人の計155人の検診結果です。うち男49人、女71人に結核検診の一つ喀痰検査を実施します。

「異常アル者男二〇女二一計四一ニシテ其内呼吸器結核患者男八女九計一七アリ、異常アル者は全数二六・四％ニシテ結核患者ハ一〇・九％ナリ、而シテ全異常者に対する結核患者ハ四一・四％ニシテ頗ル多数ナルノ観アリ」⁹と。

統計で注目をひくのは結核患者男8人中7人が10歳～15歳までのこどもであり、女9人中6人が30歳以上40歳であることです。さらに結核についての統計は白老のアイヌの死亡にも言及しています。1910年6人、1911年1人、1912年2人、3ヶ年で計9人が結核がもとで死亡しています。3コタンの結核死亡者の合計が12人であることを取りあげても白老は異常に高いことが理解できます。アイヌと結核とくに3村の結核死亡については次のように指摘しています。

全道平均旧土人結核死亡数ハ総死亡千ニ付二二七・七ナルニ拘ハラズ、右六個部落(注・白老・敷生・社台と輪西他2村の計6コ)ノモノハ三三三・三ニ当ルヲ以テ、土人部落中ニ於テモ亦大数ナルヲ見ルヘシ、而シテ結核死亡者ノ多キハ一面ニハ亦罹患人員多キ証」として、「今ヤ三二四ニ対シテ三〇ノ患者ヲ得タリ、此比例ハ一万人に付九二五ニシテ係数九・二五ニ当ル」^{10-a}

これは、100人中9人、つまり10人中約1人は結核に罹患していると警告していることになります。

これらの調査結果を踏まえて、『調査復命書』は、結核及び死亡について次の点を指摘して結びとしています。

- (一) 旧土人ノ増加率ハ一・四二%ナルモ事実ニ於テ減少ノ傾キアリ
- (二) 旧土人の肺結核患者ハ九・二五%ニ当ル
- (三) 旧土人肺結核死亡率ハ人口一万人ニ付キ八四・五ナリトス
- (四) 旧土人総死亡ニ対する肺結核死亡ハ千人ニ付三三三・三ナリトス
- (五) 旧土人ノ平均年齢ハ二八ナリトス^{10-b}

5.2.5

『調査復命書』を紹介しながら白老コタンの「人口増加」問題の背景を見ました。

多分、北海道庁は、この『調査復命書』の実態も参考にしながら、医師でありアイヌ研究者であるマンローに前述の5点について「諮問」したと推察します。

マンローの「答申」に基いてマンローのアイヌ観に迫ってみたいと思います。

ただ、この「答申」が前述したように英文からの翻訳であり、英文原本が失われている現在、疑問点があっても、これはマンロー自身に遡るのか翻訳者の問題かは解明できません。

一は、「答申」の表題です。「北海道報」の「アイヌ観」はマンロー自身のものか、編集者によるものかです。同じく「北海之教育」の「アイヌ観」から「旧土人に関する調査」への表題変更も新聞から雑誌にへ再録の際に誰の手によってなされたのかも不明です。「旧土人」に関しては「答申本文」中では一度も使用されていません¹¹

二は、答申の第一と第三に出て来る「アイヌ種族」(傍点筆者)と「アイヌ族」なる用語です。アイヌではなくわざわざ「アイヌ種族」「アイヌ族」は英文でも使い分けしているのか知りたいところですが、これまた確かめようがありません。「アイヌ種族」について言えば、さきの『調査復命書』総論の表題が「アイヌ種族ノ運命ニ付テ」とあり、「アイヌ種族」が極めて差別的に使用されているので気になるところです。

一例をあげれば「アイヌ種族ノ如キ劣等人種ハ生存競走ノ敗者トナツテ遂ニハ滅亡の運命カラ免カレ得ラレナイ」とあります¹²。

三は、第二の答申で使用されている「南方の地に於ける穢多に見るが如き階級的偏見あれども…」の「穢多」¹³です。この「穢多」はマンロー自身が使用したか否かです。これも英文の存在しない今日、確認しようがありません。

「答申」は、マンローが北海道庁への書簡で記したと同様の構成です¹⁴

第一 アイヌの人口増加に対する障害及其増加を助くる条件

- (1) 主なる原因はアルコールの飲用
- (2) 濫費及び濫費より生ずる種々の結果
- (3) 体質の低下
- (4) 結核及黴毒

第二 和人とアイヌの接触はアイヌを向上せしむるや否や

第三 家庭及社会の感化がアイヌ族に及ぼす影響

第四 アイヌは高等なる宗教を理解し又は享益し得べきか

第五 アイヌを救済し且つ進歩せしむる有効なる方法

- (1) 酒の販売の禁止
- (2) 娯楽慰安の場所
- (3) 禁酒
- (4) 肺結核の取締
- (5) 農業

第一から第四までがアイヌ現状分析で第五が救済対策です。

「答申」全体を通してマンローのアイヌに対する眼差しには、厳しい指摘もありますが、温かさが一貫しています。

次の一節は、「答申」第四に出てきます。

アイヌの老人の彼等の宗教の問題及語源の深奥なる意義に関して論議するを聞かば只教育の不充分なる差こそあれ専門的の深遠なる問題を論ずる大学の老教授と何等選ぶ所なしとの感を起すに至らん^{15-a}

実に客観的にアイヌの宗教理解を物語っていますが、アイヌを「アイヌ種族」あるいは「旧土人」と言う和人のアイヌの宗教観はどうでしょうか。その一端を『旧土人に関する調査』（北海道庁内務部 1918（大正7）年）の総論に見ることができます。

仏教、基督教等の高等宗教の旧土人に対する同化力は大ならず。……基督教は一時の物質的恩恵に浴せんが為教会に出入するの類にして、真の宗教的感化により帰依するもの殆ど皆無なり（四同化の程度・3）^{15-b}

この一節を比較するだけでマンローがアイヌに対し尊敬の念を持って接していたことが理解できます。

5. 2. 6

マンローがアイヌの将来について最も案じていたのがアルコール問題です。

「答申の核心は」と問われれば、アルコール問題と言えます。「答申」は、アルコール問題をキーワードに展開されていると言っても過言ではありません。

マンローは「答申」を「尤も主なる原因はアルコールの飲用なりとす」で始めています。マンローが、アイヌにとってアルコール問題はアイヌの将来を左右する課題と痛感していたからこそのことばです。

しかし、アルコール問題はアイヌ特有の問題ではなく「欧州諸国に於てもその飲酒の悪癖は実にアイヌに於けると同一の結果を生じつつある」とも述べています。冷静な観察から出たことばです。

冷静な観察は、アイヌにも向けられ飲酒又はアルコール問題が、今日で言う「アルコール依存症」つまり病気であることも示唆しています。

熊を狩らんが為山野跋涉する間のみは飲酒を中止す。老人の語る所に依れば狩猟より帰りし時は全く別人となれるが如き感ありと云ふ。狩猟の為数日間絶酒したる結果中には却て酒を嫌ふに至るが如きものも無きにあれど盃を重ねること兩三回に及べば彼等の飲酒癖は 然として再び催起す¹⁶

断酒（ここでは絶酒）が、アイヌを「全く別人」にすることを紹介しています。アルコール依存症として対応する必要性に気付いているのです。

この観察から断酒、ここでは禁酒の方法を種々提案します。

その一つの提案が、「儉約¹⁷」です。「儉約の習慣を養ふべく努力」することが、禁酒、断酒に繋がるとの認識です。

二つにアルコールが直接間接にアイヌの人口増加を妨げているとして「之を緩和する一縷の望は只立法の手段に依るのみ」とし、コタンで酒を売ることの禁止を提案しています。

三つ目は、いまで言う断酒会の提案です。「飲酒に対し部分的の制限と、系統的の教育及び講話とを相提携せしめ、酒及節制を勧説するの目的を以て協会を設立し其の力に依りて彼等を導くに於ては著しき効果を挙げんと信ず¹⁸⁾」

そして協会の活動内容にも具体的に言及しています。

「協会にては健康、疾病、飲酒の害毒、農耕及び其の他一般の事物に関する図解的の面白き講話を行ふなり」とし、その講師陣にも触れています。「二人の和人の講師を得れば以て足るべし。…講師たるべき二人は必ず禁酒家にして且つ能弁家たるを要す」と。さらにその一人は「一般基本的科学の知識を有する医師にして幻灯にて図解的に講話するならんには、妖怪談を聴くが如き興味を以て聴聞せしめ得べし。又一人は農業上の講話を担当して種々の注意を与ふるを任務とす」と極めて具体的な答申です¹⁹⁾。特に講師の一人が、講話中に農業について話すには理由があります。

マンローは、救済等で農業について次のように提案していることと無関係ではありません。

「アイヌに対する保護の最後的手段としては結局土地を耕作せしむることに帰着することは何等疑なき事なり」、「アイヌの保護には勸農と節酒とを第一要義とすることを是認するに於ては彼等を一定の土地に土着せしむるやう之を導くことも亦容易なるべし」とアイヌが農業を中心に生活を建てなおすことの重要性を強調しています。さらに農業については、「アイヌ小学校の現在の教師が児童に農業の方法を教へ児童は其の農園の産物を各自の家庭に持ち帰りをれるがこれは只無益の業にあらざるのみならず彼等の両親を刺激するの利益あるを信ず²⁰⁾」と述べ、こどもを通して親を教育する提案さえしています。実にきめ細かい配慮です。

ところで医師マンローは、結核についてどう答申したのでしょうか。第一の「人口の増加」の中で触れています。意外なほど簡単です。結核については他の個所にも散見できますが、アルコール問題と比較するとき、その少なさはむしろ驚きです。白老では『調査復命書』が報告するように結核は統計的に見ても最重要課題にあたります。なぜマンローは、結核ではなくアルコ

ール問題なのでしょうか。

マンローは、「答申」の中で「人口の増加」との関係で述べています。

結核及び黴毒はアイヌの人口増加を妨ぐる主要な疾病なり余は統計を有せざるを以只一般的觀察に拠るの外なきも結核は海岸に居住するアイヌより農業地方に居住するアイヌが結核の伝染力に対する力を有するやと問いた肺結核が青年者間に於尤も蔓延しつつある事実²¹

を心配しています。

この「答申」を読む限り、マンローは『調査復命書』に書かれていた白老の結核について知らないのです。「一般的觀察に拠る」と言いますので、「統計」を読んだらもう少しつっ込んだ「答申」を出したでしょうか。青年層よりも10歳～15歳のこどもたちの死亡の高さを知ったらと推察します。

しかし、結核がアイヌにとって重要な課題と認識していたからこそ第五の「救済政策」の中で、その対策を答申したと言えます。

強制的に告知せしめ或は特に講話を為す教育機関により肺結核を取締ること。此の講話にはバクテリアの觀念及びバクテリアの伝染力、咳痰の処置全治し得べき時期に於る医学上の検診の必要療治の方法等を含ましむるを要す。患者が病氣に罹りしことをよく自覺し得るのみならず、人の忌む病に罹れるを知りて正直に隠蔽せず且つ十分に之を治癒せしめんとの決意を懷くに於ては、肺結核程、治患の効を奏し得るはあらざるなり²²

医師マンローは、アルコール問題と比較して結核に対しては楽観的です。「肺結核程、治患の効を奏し得るはあらざるなり」と断言しています。その確信の背景は幾つかあげることができます。第一は、マンローが言うバクテリアつまり結核菌の正体が明らかなことです。結核菌は1882年、コッホ(Robert Koch 1843～1910)によって発見され、その対策が進んだことです。

第二は、対策の一つである予防です。検診と治療の徹底です。第三は、予防に対するアイヌへの信頼です。又はアイヌ観とも言えます。

アイヌは本来欧羅巴人に比しても愚なるものにあらず。……余は如何なる人種に於ても人間には基本的知能の存在するものにして或る種族と他の種族との間の知能上の差異なきものなりと信ずるものなり²³

アイヌは、いまで言う予防医学に十分対応できる人々であるとの裏付けから、さきの断言とともれることばがでていないのでしょうか。

結核対策と比較しアルコール問題が深刻なのは「精神」と関係するからです。マンローは「精神は社会的境遇に依りて著しく影響を受くるもの」とし「極貧及不潔は精神を圧迫する結果を生ずる」と言いながら「純粹の和人の仲間と疎隔することは精神圧迫の傾向を一層強むるなり²⁴」としつつもこの問題に関して「余は余り立ち入りて論ずることを避く²⁵」とかわしています。「答申」を意識しての和人批判回避とも理解できます。

「答申」に一貫するマンローのアイヌ理解は、現象に左右されることなく、現実を観察し判断していることです。次の一節はその典型で、人類学者にして言えたことばです。

彼等は怜悯にして昔語り（伝説）或は複雑なる儀式上の事柄を其の廃れたることばを以て語る有様より推察すれば其の記憶の力は実に驚くべきものあり恰もスパルタ人の記憶力又は昔のゴール、ブリトン人又は印度がベタの神話或はウパニヤフドを何等記録によることなくして語り伝ふるに比較するも決して劣ることなし²⁶

このような視点からなされたマンローの答申「アイヌ観」は、北海道庁内務部『旧土人に関する調査』でどのように生かされたのでしょうか。

5. 2. 7

『旧土人に関する調査²⁷⁾』(以下「調査」と省略)に直接マンローの名が出て来るのは一ヵ所だけです。しかし、名前こそ記されていませんが、マンローの「答申」を取り入れた個所は何ヵ所か見出すことができます。「調査」の目的は以下の通りです。

「本調査ハ旧土人ノ保護施設改善ニ資セムガ為ニ行ヒタルモノニシテ力メテ旧土人ノ生活状態ヲ審ニセンコトヲ期シ大正六年(注1917)一月地方教育兵事勸業衛生ノ各課ニ於テ分担ノ上材料ノ蒐集ニ着手シ約一ヶ年ノ時日ヲ費シテ取纏メタルモノナリ」²⁸⁾

構成は、総説に続き第一款 人口、第二款 習性 第三款 教育 第四款 衛生 第五款 産業 第六款 財産の状況 第七款 財産制度及財産管理 第八 救済 となっており、マンローへの諮問は、第一、第二、第四、第八に関するものと理解できます。

マンローの「答申」は総じて総説に見ることができますが、まずはマンローの名前が記されているものから。

英国の人類学研究家マンロー氏が太平洋諸島に於て土民の死滅する地方多キ事実に就き『之れ衣食の変化、酒類の飲用、結核蔓延の爲のみにあらずして、高級なる文明、惨酷なる文明に遭遇したるの結果、(欧羅巴人に接したるに依り)全く精神の萎縮を来し、延て其の肉体に激変を与へたるに基くものなり』と論断せられたる、亦以て其の一例証となすを得べし

(第一款 第三項 人口繁殖の障碍の第三目)²⁹⁾

マンローの名は冠していませんが、「答申」とほぼ同文は以下のようにあげることができます。

現時に於ても飲酒の弊甚しく、錢を得れば即直に酒に替へ、酒尽くるに至りて始めて労役に就く状態にして、土地其の他の財産を悉く飲酒の為に消尽せられつつあり（総説 第二節の四の2 飲食）³⁰

結核病は海岸部より海岸を遠く離れたる地に居住する旧土人に多きが如し（第一款 第三項 第四目）³¹

土人研究家中には旧土人を保護救済せんには禁酒の法律を設けて嚴重に取締るの必要ありとなすもの多し（第二款 第一項 第四目 第二節）³²

旧土人一般の体質低下が、其の人口繁殖障碍の大原因なるべしとは旧土人研究家の齊しく認むる所なる（第一款 第三項 第二目）³³

5. 2. 8

マンローの初期のアイヌ観を「アイヌ観」又は『旧土人に関する調査』を手掛りに検討してきました。

北海道庁からの「諮問」に対する「答申」という限定された条件の中での「アイヌ観」ですが、「答申」を一貫するものは、極めて建設的な答申といえることができます。

人類学者・医師マンローにしてはじめて可能と言えます。J・バチラー『蝦夷今昔物語』にみるバチラーのアイヌ観とも視点は違います³⁴。バチラーはあくまでアイヌは研究の対象です。たとえば「男子ハ、酒ニ耽弱ス、故ニ祭典、或ハ家屋新築、及転移等ハ殊ニ酒ヲ乱用セリ、実ニ憐ムベキハ、酒ノ為メニ精神ヲ奪ハル」にとどまっています。確かにバチラーも禁酒運動を展開し、救済に努めた結果コタンから和人によって追放されるという経験もしています³⁵。

マンローは「答申」という性格もありますが、アルコール問題にせよ結核にせよ、今日で言う「予防医学」や「社会教育」による解決の道筋を示して

います。

マンローの「答申」が、「調査」の中に取り入れられているかと言えば、5.2.6で見た通りです。無視に近い取り扱いです。都合のよい部分は引用しますが、「答申」の骨子にあたる部分にはほとんど注目していません。具体的に言えば、「答申の第五 アイヌを救済し且つ進歩せしむる有効なる方法」は「調査」のどこにも見あたりません。特に農業に触れた部分は重要ですが、第八款 第一項「旧土人保護法に依るも」³⁶の中で農具や種子の給与の記述はありますが、マンローが力説する農業、土地問題、労働については一切触れていません。改めてマンローへの「諮問」のねらいは何処にあったのかと問い質したい思いにかられます。

ここから先は筆者の推測の域を出ません。

「調査」が1918年6月刊です。しかし、「答申」は「調査」刊行より約4か月も早い1918年2月から3月にかけて「北海道報」に「アイヌ観」として、また1918年3月、4月には「北海之教育」に「旧土人に関する調査」つまり北海道庁刊『旧土人に関する調査』と同じ題名、しかもマンロー名で公表されたことは、事前に『旧土人に関する調査』内容を知ったマンロー自身の「抗議」とも読むことができます。(2011年10月26日)

追記：この研究ノートは、出村文理さんに資料その他のことで大変お世話になりました。記して感謝の意とします。

註

- 1) バチラーの初期アイヌ観については、「桃山学院大学キリスト教論集」第46号PP101～119参照
- 2) マンローについての紹介は「桃山学院大学キリスト教論集」第43号PP225～244参照
- 3) 出村文理編『ニール・ゴードン・マンロー博士書誌—帰化英国人医師・人類

学研究者一』2006年6月16日刊、前述の第43号のマンロー論では、この『書誌』を未見だったので参照できなかった。出村文理には近著として「アイヌ文化研究の帰化人医師—ニール・ゴードン・マンロー（イギリス）」がある。『異星、北天に煌めく』北海道ノンフィクション集団＝編・北海道出版企画センター刊（2011年1月20日刊）所収PP153～178。英文原稿・翻訳原稿所在不明については、『書誌』P88

- 4) 『書誌』P88 なお「アイヌ観」は「旧土人に関する調査」と同一文だが、今日「北海之教育」第302号PP14～20、第303号PP13～18、「北海道史研究」第3号PP57～61、第4号PP49～52で読むことができる。出村文理は「旧土人に関する調査」が『北海道教育会雑誌』（1986年文化評論社）で復刻されていることを紹介している。以下マンローの「アイヌ観」についての引用は、「北海之教育」に再録された「旧土人に関する調査」を使用する。特に断り書きのないときは、例第302・P0とする。
- 5) 『北海道庁警察部 白老村・敷生村・元室蘭村 旧土人結核・トラホーム調査復命書』は、『アイヌ史資料集・第2巻 医療・衛生編』（北海道出版企画センター刊1980）の中にある「復刻版」を使用した。
- 6) 『北海道庁警察部 旭川区近文部落 旧土人衛生状態調査復命書』（大正5年〈1916〉）『北海道庁警察部 日高国沙流郡ノ一部 担振国室蘭郡ノ一部 旧土人衛生状態調査復命書』（大正5年〈1916〉）『北海道庁警察部 余市郡 余市町 旧土人衛生状態調査復命書』（大正5年〈1916〉）がある。上記『調査復命書』は、前記『アイヌ史資料集 第2巻』で復刻されている。
- 7) 統計の整理は、『調査復命書』（復刻版）中、PP4～5 同じくコメントも同上
- 8) 『調査復命書』PP6～9
- 9) 『調査復命書』P16
- 10)-a 『調査復命書』P35
- 10)-b 『調査復命書』P53 『調査復命書』は、結語として結核について四項目、トラコーマについて三項目、平均年齢について一項目をあげているが、結核に

については「調査復命書」P53中実にP39をさいている。

- 11) 「旧土人」は使用されていないが、「土人」は3か所使われている。「アイヌ又は他方の文化低き種族所謂土人」(第302・P15),「和人は近来非常に土人に対して親愛と同情を表し来り」(第302・P17),「用意周到なる小規模の土人の農産展覧会を開催」(第303・P18)。第一の「土人」は先住民族とも解釈できるが、第二、第三の「土人」は文脈から言ってもアイヌと解することが妥当である。これも英文原稿がない以上確かめようがない。
- 12) 「アイヌ種族」(第302・P16)「アイヌ族」(第302・P16, 第303・P14)。これらについても註11同様確かめる手掛りはない。ただ「アイヌ種族」は和人の間では極めて差別的に使われていた。『調査復命書』P2 参照
- 13) 第303・P14。マンローは、和人とアイヌの関係を日本社会にある部落差別を引き合いに出して論じている。マンローが部落差別についてどの程度認識していたかは不明。被差別部落の人々を「穢多」と表現している。この点もマンロー自身のことばか訳者のことばかはやはり不明という外ない。部落差別を階級的偏見とし「遠からず消滅するに至らん」と楽観的だが、アイヌへの差別、部落差別は100年後の今日も続いている。しかし、部落解放を求めてはじまった「水平社」運動(1922年)は、旭川近文のアイヌ青年たちに大きな影響を与えた。砂砂市太郎等4青年は、1926年10月、「解平とは我等が解放され公平になりたいための心をそのまま名づけた」解平社を設立した。解平社運動は、やがて近文のアイヌ地返還運動へと発展していく。この間の事情は金倉義慧が『旭川・アイヌ民族の近現代史』(高文研・2006年)で紹介している。特に二章、独立への道 2「解平社」から全道アイヌ青年大会へ 3第三次近文アイヌ地問題(PP233～378)参照。紹介の中で解平社運動に対する官憲の妨害やアイヌへの協力を装いながら土地返還運動の切り崩しに奔走する北海道庁職員喜多章明の卑劣な動きが資料に裏付けられ痛烈に批判されている。喜多章明については、喜多章明『アイヌ沿革誌』(北海道出版企画センター 1987)の貝沢正(北海道ウタリ協会副理事長)の喜多評(PP1～4)が、喜多を浮き刻りにして面白。また解平社とアイヌについては、竹ヶ原幸朗「『解平社』の創立と近文アイヌ給与予定

地問題」が詳しい。竹ヶ原幸朗「研究集成第2巻」(社会評論社 2010年) PP.270~313. 参照。

14) 書簡には、第一の(1)~(4), 第五の(1)~(5)は訳されていない。

15)-a 第303・PP15~16

15)-b 北海道庁内務部『旧土人に関する調査』

16) 第302・P15 アルコール依存症(病気)を示唆する一節は「狩猟より帰りし時全く別人となれる」である。断酒さえすれば、普通の人であることを証明している。マンローは、こうも指摘する。「常習的飲酒家に対して全然禁酒せしむるより外に方法なかるべし。こは酒精中毒に関して研究を積める凡との専門家の経験に基く論断なり」第五の(3)

17) 第302・P16

18) 第302・P18

19) 第302・P19

20) 第303・P18

21) 第302・P18

22) 第303・P17

23) 第303・P16

24) 第302・P17

25) 第302・P17 和人問題に深入りしないと言いつ、アルコール問題については「余一個の最も正直なる意見としてはアイヌのみならず日本人に対しても飲酒を嚴重に禁制するの必要を認むるなり。凡改良は人間の理想に基礎を置くことを要す」第一の(4) 第302・P19

26) 第303・P15

27) 『旧土人に関する調査』北海道庁内務部 大正7(1918)年刊については、原本を参照できなかったため、以下のような資料を典拠に引用ないし参照した。原則 谷川健一編『近代民衆の記録5 アイヌ』(新人物往来社 昭和四十七<1972>年)を基本とし、小川正人・山田伸一編集『アイヌ民族近代の記録』(草風館 1998年)所収のものを使用し復刻版『旧土人に関する調査』(北海道庁

大正十一（1922）年）を参照した。大正11年版は「大正六年一月材料の蒐集に着手し約一ヶ年の時日を費して取纏めたるものなるが、……今回再び之を印刷に附するに当り、更に材料を蒐集し之を整理して現在の実状に適合せめんと考えたるも……今回は第一款戸口第三款教育にのみ大正十一年三月現在に依り多少の増補修正を行ひ他の諸款は全く旧のまま之を再録」したと凡例にある。なお大正11年の復刻版は『アイヌ史資料集 第1巻』（北海道出版企画センター1980年）所収のものを用いた。従って『旧土人に関する調査』の引用ページは、人物往来社版のものである。人物往来社版は「アイヌ」、草風館版は「アイヌ民衆」、「増補修正」版は「大正11年」と省略した。

28) 「アイヌ」P420 〈凡例〉

29) 「アイヌ」P439 比較する意味で、マンローの「答申」を引用する。

「太平洋中には人民の死滅する地方多し。これ衣食の変化又は酒精及肺結核の結果のみに因るにあらずして人民の精神の高級なる文明又は種々残酷なる文明に遭ひて萎靡したる結果なりとす」（第302・P17）。『旧土人に関する調査』では、「高級なる文明、惨酷なる文明」にわざわざ「歐羅巴人」と註を入れるが、マンロー「答申」にはない。「高級な文明」はあるいは「和人の文明」とも読める。

30) 「アイヌ」P442 マンロー「答申」（第302・P15）

「大体に於て農業的部落に於ては飲酒の悪癖甚だ尠しと雖も尚酒及其他の濫費の為に土地を質に書入し、而して到底回収すること能はざるの状態に陥るもの尠かざる等甚だ憂慮すべきものなしとせず」。

31) 「アイヌ」P439 マンロー「答申」（第302・P18）

「結核は海岸に居住するアイヌより農業地方に居住するアイヌが結核の伝染力に対して抵抗する力を有するや」

32) 「アイヌ」P451 マンローの「答申」（第302・PP18～19）

「飲酒に対し部分的制限と系統的教育及び講話との相提携せしめ……」「余は一部の立法及び協会の組織との結合に依りて偉大なる変化をアイヌの上に及ぼしうと考ふ」「之（飲酒）を緩和する一縷の望は只立法の手段に依るのみ」。マンローは、立法を提案しているが、教育しかも「健康、疾病、飲酒の毒害、農

耕其他一般」について講話する機関の設立を同時に提案している点を見落とし
てはならない。

33) 「アイヌ」P437 マンロー「答申」(第302・P17)

マンローは、「答申」第一「アイヌの人口増加に対する障害及其増加を助くる条件」
の中で、あえて一項(3)で、「第三を体質の低下とす」で詳しく論じている。と
くに「精神の刷新」の重大さを強調している。

34) 「アイヌ民族と2人の英国人」(2)の5.1.5参照 「桃山学院大学キリスト教論
集」第46号, P111, P118

35) バチラーも禁酒（断酒）の重要性に気づき禁止運動に取り組んだ。しかし、
マンローのように運動推進のための教育機関「協会」設立は提案していない。
バチラーも教育の大切さに着目しアイヌ学園を設立しているが、どちらかと言
えば保護を重視した。その一面が、北海道庁学務部社会課『土人概要』（1929年）
に紹介されている。「バチエラーの保護事業」(同書PP12～13)参照。バチラーは、
1923年以降北海道庁の嘱託。

36) 「アイヌ」PP512～515